

【複式学級】複式提案

**個と個がつながる主体的な複式の学び**  
 —認め合うかかわりを大切に—

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかかわって

複式学級には、「異学年」「少人数」という2つの大きな特性がある。1・2年生、3・4年生、5・6年生という隣接異学年の子どもが1つの教室で学び、しかも、その人数は、本校の場合各学年8人、1つの教室に16人という少なさである。本年度は複式全体で計47人の子どもが学んでいる。

そこで、複式研究テーマにある「個と個がつながる」は、その大切な47人の子どもたち一人一人がつながることをさし、また同時に異学年の集団と集団のつながりも含めて考えている。

「異学年」のかかわりでは、元来教えてあげる上学年と教えてもらう下学年という子どものかかわりが存在する。そこには、同学年の子どもだけの集団には見られない譲り合いや思いやり、そして厳しさと責任の自覚などが内在する。しかし、学び合う子どもの姿は、上学年から下学年への一方通行ではない。子ども一人一人が互いの良さに目を向け、その良さを認め合おうとする意識や態度を大切にしている。そうした主体的なかかわり合いによって、学年の枠を超えて集団と集団が、そして人と人がつながり、考えと考えが連鎖し、共に高まり合えるものと期待する。

「少人数」の大きな利点は、互いのまなざしを子ども同士が共有しやすいことである。ただ、その際、互いを深く知り合うことによる先入観や序列意識が弊害となることもある。どの仲間のすてきさにも目を輝かせ心をときめかせる、そんな公平で肯定的な感受性、認め合うかかわりを大切にする学習集団であることを基盤としたい。そうして初めて、一人一人が安心して自己表現でき、その疑問や気づきを大事にし合え、関連した伝え合いが成立し、個と個がつながり集団として連鎖する。「少人数」では、はじめからは多様な意見は出にくい。仲間との対話をくり返し連鎖していく過程で、学習対象の価値をひろく見いだしたり、真理に近づいたり、学習対象との対話も深まる。そうして、自己との対話において自分なりの成長や変容、集団としての学習の成果を感じ得る時、一人一人のまなざしに納得感や充実感、時にはさらなる高まりへの意欲、学ぶ喜びが表れる。そこに「互いのまなざしが響き合う学習」がある。

「壁の裏まわり・ひろがり」ふりがえりカード  
この時間の学習での、新たな自分の気づきや思い、考えを書こう。また、心にとびついた友達の考えと、自分ばう取り入れたかを書く。

今日は、一場面と四場面画のかけありの  
 ちがいを免強しました。  
 その中で一番心にのこった、いけんを一つし  
 うかいます。  
 歩く人の二場面はお父さんから、教え  
 たしたけれど四場面はちいちゃんから  
 教えたことと発表です。  
 たかちゃんがかたかとうとさいしほは私  
 そのいけんかたかちゃんだとは思っ  
 ていたけれどゆりなちいちゃんのつけたし  
 りはけんかかやりました。  
 いけんをいけんをいけんをいけんをいけんを  
 ちいちゃんかもう一度やりたかったか  
 けありというけんです

「壁の裏まわり・ひろがり」ふりがえりカード  
この時間の学習での、新たな自分の気づきや思い、考えを書こう。また、心にとびついた友達の考えと、自分ばう取り入れたかを書く。

今日心に残った音んがんと三つあ  
 ります。やはりおはなこい。  
 で国語で心に残った意見は、こっ  
 くんのおんこによって、うしろなわ  
 しまったもので、おんこは、おんこ  
 たせかと三つと、家族、生活や、  
 ほかもあるけど、きままで、ま  
 言ってるから、今日は、すん  
 こ、へいけんが、かしくかたです。  
 二人めは、ぼくの言った意見  
 につけたしたね生ちゃんです。ど  
 なる音ん見か、三つと、心のたの  
 につけたした、ね生ちゃんのつけた  
 は心のよるこが、です。もう一人も、す  
 立見を言ってるけど、もう三つ、  
 場所がないから、でも、人だけ、  
 います。ゆりなちいちゃんです。本  
 当に、いけん

サブテーマ「一人一人への確かなみとりと支援」では、学習対象や自己との対話もさることながら、特に仲間との認め合うかかわり、肯定的な対話が行われているかどうか、重点を置いたみとりと支援を心がけたい。少ない人数での深いかかわりという複式の特性を踏まえた学習過程を大切にしながら、その時間や単元におけるその学習の「意味と内容」をひろげることが、複式としての学びの「意味と内容」をひろげることである。

(2) 複式のめざす子ども像

① かかわりを大切に、互いのすてきを認め合い、生かし合う子ども

「少人数」であることから、みんながみんなのまなざしを共有しやすい。そして、一人の学びが全体に作用する影響は大きい。右のふりかえりカードには、仲間の意欲に触発され、(研究会当日、大勢の参会者の中でも)勇気がわいて、いつもよりがんばれた充実感が記されている。行動や意欲、発言内容など、様々な身近なかかわりから、仲間のすてきさを感じ、認め、自分にも生かそうと主体的に学ぶ子ども、学び合う子どもたちであってほしい。

今日は四場面のふりかえりカードを書きました。このころのまなざしを共有し、互いのすてきを認め合い、生かし合う子どもたちであってほしい。

「複式のまなざし・ひろがり」ふりかえりカード  
この場面の学習で、新たな自分の気づきや思い、考えを共有し、互いのすてきを認め合い、生かし合う子どもたちであってほしい。

② 自己を拓き積極的に豊かに表現し合う子ども

少ない人数においては、やはり一人一人が積極的に自分の感じ方・考え方を表現し合うことなしには、相互作用も生まれず、深まり高まりも期待できない。普段は物静かでも、授業の中ではまちがいを恐れなくて進んで発言できる、素直に表情に出せる、似た考えでも比較しながら考え自分の思いを豊かに表現できる、そんな積極性・主体性・具体性をもつ子どもであってほしい。また、そのためにも、基盤としての受容的な学習文化を構築したい。

今日は、(4)をけんきうして、自分の考えを豊かに表現し、互いのすてきを認め合い、生かし合う子どもたちであってほしい。

「複式のまなざし・ひろがり」ふりかえりカード  
この場面の学習で、新たな自分の気づきや思い、考えを共有し、互いのすてきを認め合い、生かし合う子どもたちであってほしい。

異学年のかかわりの中でも、同様な願いをもちたい。上学年からの一方向的なかかわり以上に、下学年からの質問や要求が積極的に出されてこそ、同じ高さのまなざしによる「意味」ある学びが実現できる。

2. 複式における「互いのまなざしが響き合う学習」

これまで述べてきたように、複式においては、少ない人数の子ども一人一人が、しっかりと自分の考えをもち、積極的に伝え合い、互いのまなざしを肯定的に共有し、そのすてきを認め合うことが重要である。そして、その良さを自分の感じ方や考え方、行動に生かし、共に高まり深まっていく。そんな子ども同士の温かいかわりによる学びが、複式の特性を生かした「互いのまなざしが響き合う学習」である。

左のふりかえりカードには、そのための根底となるまなざしが伺える。まずは、教材との対話の中で獲得した「意味」が記されている。続いて、仲間の意見との対話。そして最後はその視点に立つての自己との対話。その結果、再び教材と対話し、「ちいちゃん、ゆうきがあるな」と「意味」をひろげている。

「複式のまなざし・ひろがり」ふりかえりカード  
この場面の学習で、新たな自分の気づきや思い、考えを共有し、互いのすてきを認め合い、生かし合う子どもたちであってほしい。

学習集団として、思考の多様性・ひろがり深まりを生むためには、このように仲間の意見と真剣に対話し、そこで得た新たな視点や疑問、知識、技能を生かして、教材と、また自己と対話する、その営みを子ども一人一人が主体的にくりかえし、互いの良さをつなげることが必要である。右には、自らの感想が全体に提示された驚きが込められている。仲間のまなざしによる課題は、より強い意欲と対話力を生む。

今日は、自分の作文がみんなの前で読まれたので、びっくりしました。みんなの意見が、とてもよかったです。自分の考えを豊かに表現し、互いのすてきを認め合い、生かし合う子どもたちであってほしい。

「複式のまなざし・ひろがり」ふりかえりカード  
この場面の学習で、新たな自分の気づきや思い、考えを共有し、互いのすてきを認め合い、生かし合う子どもたちであってほしい。

### 3. 研究の展望

#### (1) 個と個がつながるために

##### ①話型指導

つながるためには、どの子ども、自分と比較しながら聴き合え、それがわかるように伝え合える、コミュニケーション力のある子どもたちでありたい。そのために継続して力を入れる話型指導の第一の意義は、つなげる気持ち・つながる意識の定着にある。

右のふりかえりカードの場合、基本的な型はできている。ゆえに、比較して聴き、仲間がその場面だけではなく全体を読んで発言していることを認め、その考えに共感している様子もなんとなく伺える。しかし、それにくらべて『何が』NYちゃんの「思いで」で、2人の意見を『どう比べて』やっぱすごいなと思ったのかは曖昧である。「〇〇さんに似ている、△△だと思います。わけは、××だからです。」という基本に加え、主語・述語の確かさと根拠の具体性などをも重視した話型指導の継続により、個と個が相互理解を深めながらしっかりとつながり合える。

もう一つ、少人数であるが故の甘えから、馴れ合いに陥るケースを目の当たりにすることもある。休み時間と学習時の心の面でのけじめを喚起するためにも、授業での話し方の指導は有効である。

##### ②その単元・授業への一人一人のまなざしのみとりと支援

本校複式では、国語・算数、本年度からは発達段階や系統性を踏まえ理科・社会でも、学年別の異内容同時間接指導が中心となる。そこでは、その瞬間瞬間に子どものまなざしを共有し、臨機応変に対応する、そんなリアルタイムの支援ができないこともある。例えば国語科では、「一人学習」として「書き込み」に力を入れている。その教材を自分なりに読み、「意味」を捉えておくことで磨き合いにも主体的に入っていくことができる。また、指導者も、個々の感じ方や考え方をつかんでおくことで、ポイントとなる考えを埋没させずに引き出しつなげることができる。逆にどの子どももしっかり書けていないポイントあれば、そこで発問を工夫し深めることもできる。このように、その単元なり授業へのまなざしをしっかりと捉えておくことで、2個学年間のわたりをより効果的に計画・実施できる。

##### ③2個学年の関連を意識したカリキュラム

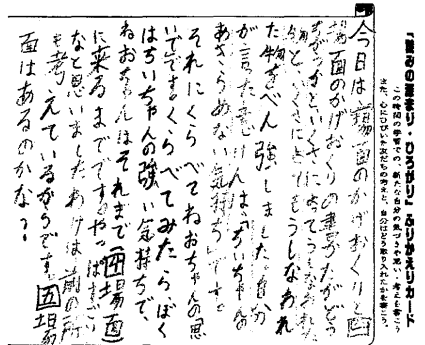
同じ教室で学ぶ2つの学年の子どもたちは、常に互いの学びの様相が意識下にある。下学年の子どもたちは特に来年の自分に思いを馳せ、上学年の学習へ関心を寄せる。また上学年も、昨年の自分たちの学びを振り返り微笑ましいまなざしを投げかける。そうして、関連性が強いほどに直接的な交流を意図的に組み、異学年の子どもや集団のつながりによる主体性・協同性を育むことができる。

ただ、いずれかの学年の学習の流れを絶つような無理な交流は避けたい。「はじめ」の学習課題の交流によっては、互いの学習の関連性を意識して授業に入ることができる。また「おわり」における本時を振り返る場面では、上学年は下学年の学びを知ることで自らの知識や技能の定着・確認を図ることができる。逆に、下学年は上学年の学びを知ることで今の自分たちの学習のひろがりを意識し、さらなる関心や意欲を生むこともある。もちろん、直接感想やアドバイスを送り合うことで、1学年の8人だけでは出てこなかった視点の置き方、考え方を期待する交流も可能となる。

指導者側からは、異学年の学習の交流を意識することにより、実際の授業における場の設定や単元構成の工夫できる幅が広がるし、理科や社会においては、準備の効率化が図れる。

##### ④複式の子どもの全体での学習活動

本年度からは、学級内での2学年間の交流に加え、複式47人の子どもたち全員での共同的な活動、縦割り集団による協同的な学習の機会を意図的に多く設定していく。それは、6年生をはじめとする上学年の自覚と主体性、また、学年を超えた個のつながり、認め合い、磨き合いを大切にしていくことであり、上学年の自覚や主体性は、次年度以降もバトンと共に受け継がれていく。そんな「異学年」「少人数」という複式の特性が生きる学習文化を全体の中にも根付かせたい。



(2) 主体的な学びを実現するために

① 上学年の自覚と自信

上学年だからできて当たり前という見方・考え方より、できた上学年をほめることのほうが下学年に与える効果は大きく、学級全体の意欲や主体性を育むことになる。もちろん、複式全体での活動においては、各学級での指導以上に上学年に委ねる時間と場面を多くし、その自覚と主体性に期待したい。

② 司会と板書

学びの主体は、当然子どもでもある。とりわけ間接指導時には、司会と板書係が中心となって学習が進められる。もちろんそれは、一朝一夕にできるものではなく、積み重ねによって成立していくものである。そこで、司会や記録、またそのフォローの態度や技能として、発達段階を考慮した具体的な目標をもち段階的に力を付けていけるよう指導している。

「読みの深まり・ひろがり・ふりかえりカード」  
この時間の学習での、新たな自分の気づきや思い・考えをここに、心にひびいた友達の考えと、自分を自分らしく入れたかを書こう。

今日はちいちゃんのかげおくり四角面ありて、  
 一番心にとこたの持てて発表しました。  
 発表の家族をまじつづけるのを待たして、  
 発表の家族をまじつづけるのを待たして、  
 わかるといふこと大切にしていく。  
 あとは、ちいちゃんの家は死んでい  
 なかた。どうしてか、どうしてか、  
 言おうと、ちいちゃんは家族を心配する  
 気持ちがよくわかるからです。  
 今日、けんきょう会が少しキレキレな  
 したけれど、上手にしゃべりできたので  
 よかったです。

	司 会	板 書	フォロー
1年生	偏りなくてきばきと指名できる。	自分の考えを分かるように大きな字で板書できる。	みんなに聞こえるように大きな声で話し、話し手を見ながら聞ける。
2年生	てきばきと指名し、場に応じて注意を促せる。	発言者の考えを分かるようにいい字で板書できる。	基本的な話型に気をつけ、関係付けながら話し、うなづきながら聞ける。
3年生	関連した発言がつながるよう自覚をもち司会できる。	発言者の考えの要点を整理して板書できる。	似た点や違いが明確に伝わるよう分かりやすく話し、比べながら聞ける。
4年生	進行を考えながら意見をまとめ、次の課題に進める。	大切な意見の表現効果も考えながら、てきばきと板書できる。	事実と感想の違いを明らかにして話し、比較しながら受容的に聞ける。
5年生	場や状況を考え、自ら応じ返したり問うたりできる。	意見を取捨選択し、必要な内容を関連づけながら板書できる。	根拠を具体的に挙げながら説得力をもって話し、比較しながら聞ける。
6年生	課題解決に向け、臨機応変に工夫できる。	自分たちの学びの足跡が分かるように工夫して板書できる。	視点や論点の広がりがやずれを意識しながら整理しながら話し、聞ける。

(3) 一人一人を大切にする、客観的な評価と具体的な支援

複式提案について、直接内容に触れていないものもあるが、昨年度の研究会における3年生8人全員の「読みのひろがり深まりふりかえりカード」を挿し入れながら説明してきた。カードの中には、心にひびいた友達の考えと、それを自分はどう取り入れたかも書くようにしている。その意識と実践力を磨くためであるのは述べるまでもない。そうしてここに、3年生全員のカードを取り上げたのは、少人数の子どもたち一人一人、どの子どもの学びを客観的に確かに評価し、その子のよりよい学びを支援していく。その積み重ねを何よりも重視していこうとする意志による。このカードは、授業後の子どものふりかえりである。文中には、その子の授業における思考の流れや変容の過程が表現されている。また、レディネスの段階でのみとりと比較することで、その子の変容をとらえることができるし、その子自身も自己評価することで自分の学びを見つめ、自己との対話を深めることができる。

しかし、実際の話し合い磨き合いにおいて、個々のすてきさを認め、それをつなげるための的確で具体的な支援があつてこそ、本物の授業である。子どもにとっても、個と個がつながり、集団に連鎖し、響き合い、そうして学ぶ喜びを感じ、さらなる学習意欲、主体性へとつながる。それが価値ある授業である。意見内容はもちろん、声や表情、動きなど、一人一人の反応に対して、敏感に誠実に受け、応えていけるよう努めたい。